

マイスナー効果を理解するために

磁場と波動方程式

$H = \text{rot } A$ で定義されるベクトルポテンシャル A をもちいて磁場中の運動エネルギーは

$$\frac{1}{2} m v^2 = \frac{1}{2m} \left(\mathbf{p} - \frac{e}{c} \mathbf{A} \right)^2$$

である。ここでSchrodingerのハミルトニアン¹の運動エネルギーとして

$$\frac{1}{2m} \left(\frac{\hbar}{i} \nabla - \frac{e}{c} \mathbf{A} \right)^2$$

を入れることになる。

粒子と電磁場の相互作用の取り扱い(解析力学の復習)

電荷 e を持った荷電粒子が速度 \mathbf{v} で運動するとき、電磁場 \mathbf{E} 、 \mathbf{H} がこれに及ぼす力は、Lorentz力という。

$$e\left(\mathbf{E} + \frac{1}{c}\mathbf{v} \times \mathbf{H}\right)$$

粒子の質量を m 、座標を x, y, z とすれば、その運動方程式

$$m \frac{d^2x}{dt^2} = eE_x + \frac{e}{c} \left(\frac{dy}{dt} H_z - \frac{dz}{dt} H_y \right),$$

..., ...

と書ける。

E, Hをスカラー ϕ 、およびベクトル・ポテンシャル \mathbf{A} で表わすと

$$m \frac{d^2x}{dt^2} = -e \frac{\partial \phi}{\partial x} + \frac{e}{c} \left\{ -\frac{\partial A_x}{\partial t} + \frac{dy}{dt} \left(\frac{\partial A_y}{\partial x} - \frac{\partial A_x}{\partial y} \right) - \frac{dz}{dt} \left(\frac{\partial A_x}{\partial z} - \frac{\partial A_z}{\partial x} \right) \right\},$$

..., ...

(1)

と書かれる。

前記の運動方程式は、ハミルトニアンとして

$$H = e\varphi + \frac{1}{2m} \left\{ \left(p_x - \frac{e}{c} A_x \right)^2 + \left(p_y - \frac{e}{c} A_y \right)^2 + \left(p_z - \frac{e}{c} A_z \right)^2 \right\} \quad (2)$$

をとったときの正準方程式と同等であることが次に示される。

$$\left. \begin{aligned} \frac{dx}{dt} = \frac{\partial H}{\partial p_x} = \frac{1}{m} \left(p_x - \frac{e}{c} A_x \right), \\ \dots, \quad \dots, \end{aligned} \right\} \quad (3)$$

$$\left. \begin{aligned} \frac{dp_x}{dt} = - \frac{\partial H}{\partial x} = -e \frac{\partial \varphi}{\partial x} + \frac{e}{mc} \left\{ \left(p_x - \frac{e}{c} A_x \right) \frac{\partial A_x}{\partial x} \right. \\ \left. + \left(p_y - \frac{e}{c} A_y \right) \frac{\partial A_y}{\partial x} + \left(p_z - \frac{e}{c} A_z \right) \frac{\partial A_z}{\partial x} \right\}, \\ \dots, \quad \dots \end{aligned} \right\} \quad (4)$$

$$\left. \begin{aligned} \frac{dx}{dt} = \frac{\partial H}{\partial p_x} = \frac{1}{m} \left(p_x - \frac{e}{c} A_x \right), \\ \dots, \quad \dots, \end{aligned} \right\}$$

の式から

$$p_x = m \frac{dx}{dt} + \frac{e}{c} A_x, \quad \dots, \quad \dots$$

これを t につき微分すれば、 A_x, \dots が、 x, y, z, t の関数であることを考慮して、

$$\left. \begin{aligned} \frac{dp_x}{dt} &= m \frac{d^2x}{dt^2} + \frac{e}{c} \frac{dA_x}{dt} \\ &= m \frac{d^2x}{dt^2} + \frac{e}{c} \left\{ \frac{\partial A_x}{\partial x} \frac{dx}{dt} + \frac{\partial A_x}{\partial y} \frac{dy}{dt} \right. \\ &\quad \left. + \frac{\partial A_x}{\partial z} \frac{dz}{dt} + \frac{\partial A_x}{\partial t} \right\}, \\ &\quad \dots, \quad \dots \end{aligned} \right\} \quad (5)$$

を得る。

一方、(4) の右辺は、(3) を代入して、

$$\left. \begin{aligned} -e \frac{\partial \varphi}{\partial x} + \frac{e}{c} \left\{ \frac{dx}{dt} \frac{\partial A_x}{\partial x} + \frac{dy}{dt} \frac{\partial A_y}{\partial x} + \frac{dz}{dt} \frac{\partial A_z}{\partial x} \right\}, \\ \dots, \dots \end{aligned} \right\} \quad (6)$$

と書かれるから、(5)、(6) を等しいと置けば、丁度 (1) が得られる。

よって、ポテンシャル、 φ 、 \mathbf{A} で表せるような電磁場における質量 m 、電荷、 e なる粒子に対するハミルトニアンは

$$H = e\varphi + \frac{1}{2m} \left(\mathbf{p} - \frac{e}{c} \mathbf{A} \right)^2$$

で与えられる。

粒子の確率密度と流れの密度 (j) の保存則の量子力学的取り扱い

$$|\psi(\mathbf{r}, t)|^2 dv$$

Schrodinger 方程式の波動関数を用いて、上記のように、時刻 t に \mathbf{r} の位置の微小体積 dv の中に粒子を発見する確率を表せる。

粒子の出入りがあることを考慮し、粒子の流れの密度 j を定義する。 $j dS$ は j の方向と直角な微小面積 dS を横切る粒子数である。 r に辺が dx, dy, dz である微小な直方体に、上下の面を通しての流れの dt の時間内に流れ込む粒子数の収支は、

$$[j_z(x, y, z) - j_z(x, y, z + dz)] dx dy dt = \left(\frac{\partial}{\partial z} j_z \right) dx dy dz dt$$

である。前後、左右の面についても同様にして、全収支と dv の中の粒子の存在確率は等しいので

$$d(|\psi(\mathbf{r}, t)|^2) dx dy dz = - \left(\frac{\partial}{\partial x} j_x + \frac{\partial}{\partial y} j_y + \frac{\partial}{\partial z} j_z \right) dx dy dz dt \quad \text{従って、}$$

$$\frac{\partial}{\partial t} (|\psi(\mathbf{r}, t)|^2) = - \left(\frac{\partial}{\partial x} j_x + \frac{\partial}{\partial y} j_y + \frac{\partial}{\partial z} j_z \right) = - \operatorname{div} \mathbf{j} = - \nabla \cdot \mathbf{j} \quad (1) \quad \text{を得る。}$$

(1) の左辺は

$$\frac{\partial}{\partial t} (|\psi(\mathbf{r}, t)|^2) = \frac{\partial}{\partial t} (\psi^*(\mathbf{r}, t)\psi(\mathbf{r}, t)) = \psi^* \frac{\partial \psi}{\partial t} + \frac{\partial \psi^*}{\partial t} \psi \quad (2)$$

である。波動関数に時間変化は、Schrodinger 方程式で下記のように与えられる。

$$i\hbar \frac{\partial \psi}{\partial t} = \frac{1}{2m} \left(\frac{\hbar}{i} \nabla - \frac{e}{c} \mathbf{A} \right)^2 \psi + V(\mathbf{r})\psi$$

ψ と複素共役な ψ^* については

$$-i\hbar \frac{\partial \psi^*}{\partial t} = \frac{1}{2m} \left(\frac{\hbar}{i} \nabla + \frac{e}{c} \mathbf{A} \right)^2 \psi^* + V(\mathbf{r})\psi^*$$

これらを (2) に代入すると

$$\frac{\partial}{\partial t} (|\psi(\mathbf{r}, t)|^2) = -\nabla \cdot \left(\frac{\hbar}{2im} (\psi^* \nabla \psi - \psi \nabla \psi^*) - \frac{e}{mc} \mathbf{A} \psi^* \psi \right) \quad (3)$$

となる。

(3) と (1) を合わせると

$$\mathbf{j} = \frac{\hbar}{2im} (\psi^* \nabla \psi - \psi \nabla \psi^*) - \frac{e}{mc} \mathbf{A} \psi^* \psi$$

が得られる。これは、量子力学での確率の流れの保存則の一般的な式である。電流は、電荷 e をかければ、次のように得られる。

$$\mathbf{i} = e\mathbf{j} = \frac{e\hbar}{2im} (\psi^* \nabla \psi - \psi \nabla \psi^*) - \frac{e^2}{mc} \mathbf{A} \psi^* \psi$$

磁場がゼロの時に、電流は流れていないとすると、上式の第一項は、ゼロとする。磁場があると当然に波動関数は変化し、第2項は、ゼロにならないと同時に、第1項もゼロとならない。

ここで、もし、波動関数が微小な磁場でほとんど変化しないと仮定すると

$$\mathbf{i} \cong -\frac{e^2}{mc} \mathbf{A} \psi^* \psi$$

になる。この時に、**マイスナー効果**が導かれることを示す。

磁場侵入長

アンペールの法則から

$$\nabla \times \mathbf{H} = A \mathbf{i}$$

と書ける。cgs ガウス単位系では $A = 4\pi$ にとって

$$\nabla \times \mathbf{H} = 4\pi \mathbf{i}$$

になる。これは電磁気学の Maxwell 方程式の一つである。

ここで、

$$\nabla \times (\nabla \times \mathbf{A}) = -\frac{4\pi e^2}{mc} |\psi|^2 \mathbf{A}, \quad \nabla \times \nabla \times \mathbf{H} = -\frac{4\pi e^2}{mc} |\psi|^2 \mathbf{H}$$

が得られる。いま ψ をもっている系が三次元空間の x の正の領域をうずめているとし、 x の負の領域は真空で、磁場が z 方向にだけ H_0 でかかっているとすると

$$\frac{\partial^2}{\partial x^2} H_z = \frac{4\pi e^2}{mc} |\psi|^2 H_z$$

$$\frac{\partial^2}{\partial x^2} H_z = \frac{4\pi e^2}{mc} |\psi|^2 H_z$$

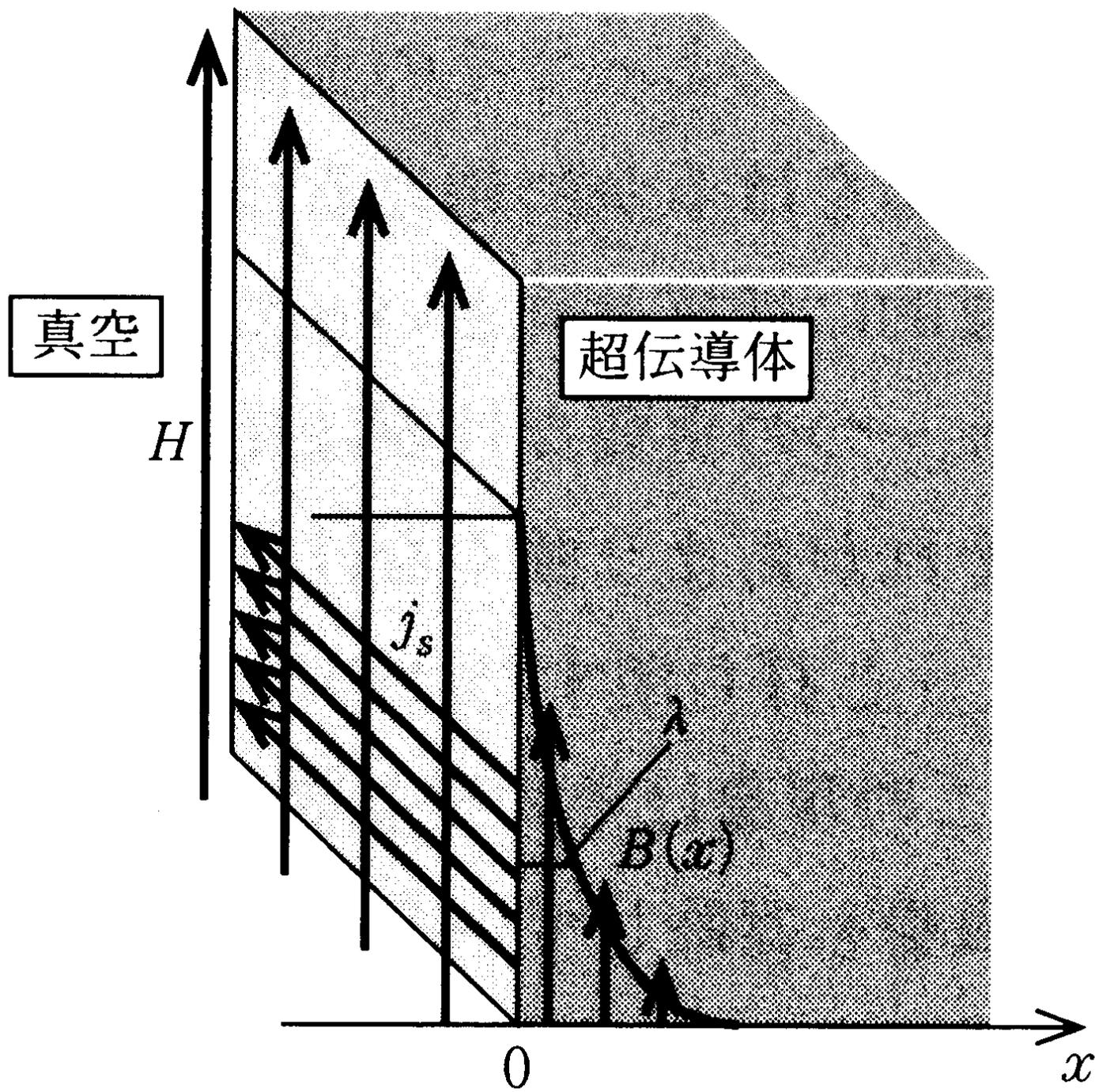
となり、この微分方程式の解は

$$\begin{cases} H_z(x) = H_0 \exp(-x\sqrt{4\pi e^2 |\psi|^2 / mc}) & x > 0 \\ H_z(x) = H_0 & x < 0 \end{cases}$$

であることは代入によって確かめられる。つまり、磁場は系の内部に向か
急速に減少して、ゼロに近づく。 $H_z(x)$ が $1/e$ になるのは x が

$$\lambda = \left[\left(\frac{4\pi e^2}{mc} \right) |\psi|^2 \right]^{-1/2}$$

のところである。したがって、もし系が λ よりも充分大きければ、磁場
とんど系の中に入れないことになる。すなわち系は完全反磁性を示す。



磁場と摂動論

ポテンシャルが時間によっていないときには

$$\psi = f(t)\varphi(\mathbf{r}), \quad f(t) = ce^{-iEt/\hbar}, \quad \left[-\frac{\hbar^2}{2m} \nabla^2 + V(\mathbf{r}) \right] \varphi(\mathbf{r}) = E\varphi(\mathbf{r})$$

であり、この最後の式は

$$\mathcal{H}\varphi(\mathbf{r}) = E\varphi(\mathbf{r})$$

と書け、これを満足するような不連続な $\varphi_n(\mathbf{r})$ と E_n が固有状態の空間部分とその固有エネルギーである。

そこで、ある系についてハミルトニアンが

$$\mathcal{H} = \mathcal{H}_0 + \mathcal{H}'$$

と分解でき、 \mathcal{H}_0 については

$$\mathcal{H}_0\varphi_m = E_m\varphi_m$$

の E_m と φ_m がわかっていて、かつ \mathcal{H}' が小さいときを考える。 \mathcal{H}' の小ささの目印として

$$\mathcal{H} = \mathcal{H}_0 + \lambda\mathcal{H}'$$

と書き、あとで λ を 1 にすることにする。解くべき方程式は

$$\mathcal{H}\psi = W\psi$$

であるので W と ψ を λ についてべき展開して

$$\begin{cases} \psi = \psi_0 + \lambda\psi_1 + \lambda^2\psi_2 + \dots \\ W = W_0 + \lambda W_1 + \lambda^2 W_2 + \dots \end{cases}$$

とすると

$$(\mathcal{H}_0 + \lambda\mathcal{H}')(\psi_0 + \lambda\psi_1 + \dots) = (W_0 + \lambda W_1 + \dots)(\psi_0 + \lambda\psi_1 + \dots)$$

λ のべきで分類すると

$$\begin{cases} \mathcal{H}_0\psi_0 = W_0\psi_0 \\ \mathcal{H}_0\psi_1 + \mathcal{H}'\psi_0 = W_0\psi_1 + W_1\psi_0 \\ \dots\dots\dots \end{cases}$$

となる。ここで

$$\psi_1 = \sum_n a_n^{(1)}\varphi_n$$

と書き、

$\lambda=0$ のときの ψ_0 を φ_m とすれば

$$\mathcal{H}_0 \sum_n a_n^{(1)}\varphi_n + \mathcal{H}'\varphi_m = E_m \sum_n a_n^{(1)}\varphi_n + W_1\varphi_m$$

もう一度 (4-1-33) を使って

$$\sum_n a_n^{(1)}E_n\varphi_n + \mathcal{H}'\varphi_m = \sum_n E_m a_n^{(1)}\varphi_n + W_1\varphi_m$$

$$\sum_n a_n^{(1)}(E_n - E_m)\varphi_n + \mathcal{H}'\varphi_m = W_1\varphi_m$$

ここで

$$\begin{cases} \int \varphi_m^* \varphi_n dv = \delta_{m,n} \\ \delta_{m,n} = 0 & (m \neq n) \\ \delta_{m,n} = 1 & (m = n) \end{cases}$$

(4-1-40) に左から φ_k^* をかけて全空間で積分すると

$$\sum_n a_n^{(1)} (E_n - E_m) \delta_{k,n} + \int \varphi_k^* \mathcal{H}' \varphi_m dv = W_1 \delta_{k,m}$$

になる。左からと指定したのは、 \mathcal{H}' はただの数ではなく ∇ のような演算子を含んでいるからである。

$$\mathcal{H}'_{k,m} = \int \varphi_k^* \mathcal{H}' \varphi_m dv$$

という表記法を使うと

$$\sum_n a_n^{(1)} (E_n - E_m) \delta_{k,n} + \mathcal{H}'_{k,m} = W_1 \delta_{k,m}$$

$k=m$ のとき

$$a_k^{(1)} (E_k - E_m) + \mathcal{H}'_{k,m} = W_1 \delta_{k,m}$$

ここで $k=m$ とすれば

$$W_1 = \mathcal{H}'_{m,m}$$

$k \neq m$ では

$$a_k^{(1)} (E_k - E_m) = -\mathcal{H}'_{k,m}$$

となって $a_k^{(1)}$ がきまる。

したがって λ の一次まででは

$$\psi = \varphi_m + \sum_n a_n^{(1)} \varphi_n = \varphi_m + \sum_n \frac{\mathcal{H}'_{k,m}}{E_m - E_n} \varphi_n$$

したがって λ の一次まででは

$$\phi = \varphi_m + \sum a_n^{(1)} \varphi_n = \varphi_m + \sum \frac{\mathcal{H}'_{k,m}}{E_m - E_k} \varphi_k$$

となる。上ではもとの方針通り $\lambda=1$ とおいた。 $\mathcal{H}' \rightarrow 0$ で $\phi = \varphi_m$ にならなくてはならないという条件から (4-1-48) の和のうち $k=m$ は除外しなくてはならない。つまり $a_m^{(1)} = 0$ である。そこで結局第一近似として

$$W \cong E_m + \mathcal{H}'_{m,m}$$

$$\phi \cong \varphi_m + \sum_{k \neq m} \frac{\mathcal{H}'_{k,m}}{E_m - E_k} \varphi_k$$

$$\frac{1}{2m} \left(\frac{\hbar}{i} \nabla - \frac{e}{c} \mathbf{A} \right)^2 + V(r) \cong \frac{1}{2m} \left(\frac{\hbar}{i} \right)^2 \nabla^2 - \frac{e}{2mc} \left(\frac{\hbar}{i} \right) (\mathbf{A} \cdot \nabla + \nabla \cdot \mathbf{A}) + V(r)$$

磁場中での摂動項は、以下に与えられる。

$$-\frac{e\hbar}{2mci} (\mathbf{A} \cdot \nabla + \nabla \cdot \mathbf{A})$$

この摂動によって、波動関数に変化しない条件は、基底状態とエネルギーの高い固有状態にエネルギーギャップがあることである。

問題3

(1)を使って(3)式を計算し、

$$\mathbf{j} = \frac{\hbar}{2im} (\psi^* \nabla \psi - \psi \nabla \psi^*) - \frac{e}{mc} \mathbf{A} \psi^* \psi$$

となることを示せ。

問題4

マイスナー状態で磁場が $H_z(x) = H_0 \exp(-x/\lambda)$ となる。

この時、表面を流れる超伝導電流を求めよ。